

2004 Aug.

8

VOL.12

これからこうなる。こう対処しよう。  
船井幸雄とその仲間が伝えたいメッセージ

<http://www.funaimedia.com>

月刊 ファイメディア

# Funai\*Media

「人間力」  
対談

## 押し迫る資本主義の終焉 「お金」から「思い」の時代へ

経済アナリスト 藤原直哉・本誌主幹 船井幸雄

夏休特別企画 この夏、遊びとくつろぎのスポット

「河口湖自然楽校・イヤシロチ ウェルネス・創造の森」

「ご購入者  
紹介キャンペーン」  
●あなたの大切な方へ  
月刊「Funai\*media」  
見本誌を1冊プレゼント。  
詳しくは巻末八ガキで



特別企画 ● 日本から「百匹目の猿現象」が起きる!!

新連載 ● アーユルヴェーダで幸せ追求 小沢泰久

新連載 ● 夢とロマンをもって生きてみよう 三宅國秀

好評連載中

高塚 猛の「幸せの研究」⑫ 最終回

本田 健の 幸せな「成功者への道」⑫ 最終回

イヤシロチ探訪  
vol. 34  
青森・秋田

# 八甲田山と十和田湖周辺



着物をとおして  
日本人にとって大切な  
思いやりの心を  
伝えたい

Woman  
@ワーク

「ゆめの家」代表

# 高良喜美子さん



沖縄の、とくに女性たちの底抜けの明るさと、明るさの陰に見えるたくましさ、しぶとさは何だろう。圧倒されるような前向きエネルギーを発散させながら笑顔振りまく。その背後にはたぶん、沖縄の歴史がある。人知れぬ苦勞がたっぷりある。「私、これでも人見知りするんですよ」と、美しい笑顔で語る、ゆめの家代表の高良喜美子さん。いま一人で簡単に着られる「ファンタジーきもの」にかけ、かけがえのない夢の物語に耳を傾けたい！





琉球絣が並ぶ「ゆめの家」の店内。



世代を越えて、同じ着物を楽しめる。

### 船井会長の言葉に支えられて 体と心と財布の健康をバランスよく！

13年前、船井会長が沖繩を訪ねた折、友人に頼まれて観光の案内役を務めたのが、ツアコンタクターをしていた高良喜美子さんだった。「お忙しい船井先生に、沖繩ではホッとさせていただきたい」という一心だった。毎年、船井会長が沖繩を訪れるたびに彼女が案内役を務めることになった。不思議なことに、そばに居ると自分もホッとした。

彼女が、着物着付け教室も開いていることを知った船井会長が「PRのお手伝いをしましょうか」と声を掛けた。高良さんは断った。「私は仕事としてではなく、個人、高良喜美子として好きで沖繩の案内役

をしているのだから、と黙っていました。そのころの私には、先生のお気持ちがまるで分かりませんでした」

昨年、新たな気持ちで仕事に取り組みることになり、「ファンタジーきもの」の普及に賭けようと思ったとき、素直に、「先生。3分間で一人を着られる着物の良さをぜひ見てください」と頭を下げるのができた。3分間の実演。船井会長が答えた。「やっ」と君を助けることができるね。そのひと言が胸にこたえた。「そうだったのか、先生は、そんなお気持ちで私に声を掛けてくださったっていいのか。チャンスが来て、使命を自覚し、応援してほしいと思ったときに船井会長が、ひと言で受けてくれた。」

「先生に教わったことが、私を支えてくれました。例えば、体と心と財布の健康の三つがバランスよくとれる人になりなさい、です。この三つがそろったとき、自分のやりたいと思うことがやれるんですね」

沖繩生まれの沖繩育ち、体の健康には自信がある。「心の健康については結婚25年の夫や先生のおかげでますます。財布の健康の大切さについては、ちょっと長くかかったけれど、13年たつて気づきました」

彼女は恵まれた家庭で愛を受けて育ったのだが、成長の過程で苦しい時期があった。19歳のとき、彼女のご主人になる高良弘さんが「一人の苦勞より苦勞を二人で分け合えば、力が倍になるよ」と言ってくれた。心配された若い二人の結婚に「若くても、ちゃんと生きてるから大丈夫」という男の言葉に救われた。「このお父さんのためなら、何でも我慢できる」と思えた。

30年間の公務員生活を勤めたご主人が、「やり残すと悔いが残る」と定年前に辞めて沖繩人の本領「海人丸」で仕事を始めた。このご主人も「ただもの」じゃない。

彼女は着物着付け教室で頑張ってきたのだが、子どもが成長して子育ても終わり、仕事ももう一つ伸び悩んで「もうやめようか」と思った。そんなとき、ご主人は「着物の仕事はやめないほうがいい。これからだよ」と言ってくれた。夫にはずっと支えられ、愛をもらってきた。これもうれしい気づきだ。

### 「ファンタジーきもの」で 日本人の大切な心を守り育てたい

和裁の先生がある日、「ジベタリアン」の若者たちに首をかしげた。ところが、ゆかたブームになってゆかたを着ると地べたに座らないどころか、襟を正して姿勢がよくなり、振るまいもやさしくなる。男性は女性をエスコートする。

なぜ、若者たちは着物を着ないのだろう。苦しい、きつい、洗濯機で洗えない…。彼ら・彼女らに、なんとか着物に袖を通してもらいたい。そのためには一人で簡単に着られる着物があればいい。そんな考えから「ファンタジーきもの」が誕生した。

高良喜美子さんは「人間は心、身体は心を纏う衣服、衣服は生き方を主張するもの」という哲学者の言葉が好きだ。着付け教室で疲れ悩んだとき、この言葉に支えられた。人が心を装い、主張する着物を扱う仕事への確信を与えられてきた。



1960年、沖縄県今帰仁（ナキジン）村出身。18歳で結婚。JTBを退職後、27歳で「ゆめの家」を始める。昨年8月に「ファンタジーきもの」に出会い、自分が本当に伝えたかったことを再確認。着付けの技術ではなく、着物そのものを広めるために尽力している。  
TEL：098-868-9702  
ホームページアドレス  
<http://www.yumenoya.jp/>



「ゆめの家」のスタッフの皆さん。

洋服はデザイナーのデザインしたものを着る。着物は形は決まっているが、着る人一人ひとりの個性や思いでデザインして着ることが出来る。着物は心で装うものなんだ。着物に表現される陰陽や結びの思想・言葉を守り伝えたい。着物をとおして、日本の伝統文化、日本人にとって大切な思いやりの心を伝えることができるはずだ。

彼女は、1年ほど前に友人にすすめられて「やってみようか」と気持ちが高揚した。すでに、本来の着物を着る人も、だから着付け教室に通う人も少なくなった。しかし、一人でも多くの人に着物を着てもらいたい。だって、着物は日本人の心を豊かにしてきただものではないか。

洋服感覚で楽しめるのが「ファンタジーきもの」だ。長襦袢なしで、襟と着物をマジックテープでとめる。前帯とお太鼓が一体、帯締めでキュッと結ぶ。3本の紐でキリッと結んで3分間、慣れれば2分以内で装える。洋服の上からでも着られるし、立体裁断で着る人の体型に合わせて縫うからぴったりフィットする。窮屈な思いもなく着られるうえに型崩れしない。さらに洗濯機で丸洗いできてノーアイロン。コンパクトにたためる。これまでの着物のマイナス面が一挙に解消された。

地元、沖縄の産業に危機感をもつ人は多い。沖縄の伝統工芸品・琉球緋も織り手になる人は多いのに着る人がいない。流通に乗らない。着物ショーのボランティアでお

つき合いのある沖縄の伝統工芸品・琉球緋の産地、南風原（ハエバル）の町長さんが、ファンタジーきものショーを見て、「素晴らしい。琉球緋でファンタジーきものをつくれば村興（こし）につながるだけでなく、外国人にも簡単に着られるのだから琉球緋を世界に広げることになる」と認めてくれた。

着付けが大変だからと着物を洋服に仕立て直して着る時代に、ファンタジーきものならワンピースでも着るように簡単に着ることができ、反物のすべてを無駄なく生かすことができる。沖縄県の産業振興課で見てもらったら「沖縄の産業にとって画期的だ。携わる人の仕事につながるし、励みにもなる」と支持を得た。高良喜美子さんは大胆だ。「琉球緋を広めたい。着物を全国に広めたい」と元気いっぱいだ。

### 「ファンタジーきもの」で見る夢は、マザー・テレサが歩んだ愛の道

今年春、那覇の新都心エリアに「ゆめの家」を進出オープンして、いよいよ、夢の実現に向かってスタートを切った。「ゆめの家」のネーミングは12年前、ジョセフ・マーフィーの本に登場する儲かるお店「ドリームハウス」からとったもの。彼女はもとも夢を見続けてきた人だ。

楽しく着物の仕事をする母の姿を見て育った娘さんが、和裁の道に進んだ。嫁ぐ1年前まで、ゆめの家で着物を縫ってくれた。彼女がスタッフに言い続けることがある。「疲れているとき、嫌な気分るときは縫わないように。着る人の幸せを祈る思いがな

いときは、たとえ納期に遅れても針を持つてくれるな。その気持ちは着る人に伝わりますよ」。だから、ゆめの家の着物は羽織ると、ふわっとしている。「一針一針に思いがこもっているんです。この私の原点である心の健康は船井先生に教えられたことです」。

そして、体と心と財布の健康がそろったとき、ということは、経営を安定させ、「ファンタジーきもの」で財布を健康にし、少しずつ蓄えをプールして行って、目標は60歳、彼女の尊敬するマザー・テレサに習って、沖縄に子どもたちのための孤児院をつくる夢がある。

### 「マザー・テレサになりたい！」

かつて「鐘の鳴る丘」の施設を見学した。塀がなかった。ここで子どもたちは愛をいっぱいもらって育っていく。沖縄にも親に虐待されたり、親と別れたりする子どもたちがたくさんいる。子どもたちには母親の愛が必要だ。愛が足りない子どもたちに愛を与える場をつくりたい。「それが私の人生の最終目標なのね」

目標ができて、生き方が変わった。求めるのではなくて与える喜びを知った。「子ども達のために」と思えば、人見知りの彼女が大胆な営業ができるようになり、「生んでくれて、いま生きていて、おかげさまでありがとう」と素直に言えるようになってきた。「出会う人に笑顔に向けて、ホッとした時間を過ごしていただく。それが私の使命なのかなあ」とやさしく語る。沖縄の碧い空の下、天真爛漫な笑顔が輝く。